遊行柳

次第

いまだしらぬ旅衣法に心やいそぐらん

早詞

〽是は諸國遊行の聖にて候我一遍上人の教をうけ遊行の利益を六十餘州にひろめ六十万人決定往生の御札をあまねく衆生にあたへ候此ほどは上總國に

はしの光より奥へ照心さしは
娑婆の國に迎ふ法乃さく
迷はぬ月も光そふ心のおくを
しら河乃関路とききて秋風も
たゝ夕暮の風清くふりて宵に
宿をかる里夜月もみ書よまわみ
くわく急を避よ膏にやー

白川の関なをもきぬみこ秋よ
あまさき乃みえてはゞ廣き方へ
ゆのはやとおりひよ　なみく
遊行上人孫依乃人よやつ参
るしれは　遊行の里とは札孫
清所望ゆくより花足なれとも
分かた急行く　きぬや浄札なれも

下同

こ那さへいう世紀へとそぞひ

しら馬ふ代ありしまだきたまへ

中

わがのりたまへと待人

上音

実なる那江にしつゞく人跡絶て

あまたの流れもみぎはしも蓬生前うや

もゝ花の咲くる浅茅生や袖よ

くちぬ秋の霜露やかゝれきたる

みれば着な残る古塚よ朽木の

柳枝さひて陰ふむ道ハ末も那く

風のみ渡る氣色かな〳〵

二ノ句

こゝ那

きうせいしの海さまぶへみ

平詞

是成古塚乃上なる朽木の

柳まをん能く名を得たる　梅老

此塚の上なる木乃柳まて

ろひ無盡くや實川岸も水張て
河うひ秋朽残る老木もなうれ
みえけうひ薄のえりひ柳星
まず哥書精をうけむ有様下りとふ
星霜しかわたかざそて流乃
世よれ此木やうせなりしく
りうる竹ふ庵し　昔乃人のや

昔ハ鳥羽院乃北面佐藤兵衛尉
乃りきよ出家し西行と申す
えし哥人ば国よすま修行し
ばはえ無月花によば川岸乃
本乃木まで志りし立寄竹ひ流く
一首を詠し竹ひし地　謂を
きけハ西なや梅々西行上人乃

和歌とは遠き云乃葉や　むかし
六時不断の法にはとめて桜花
まことにも此集を伝へ給ひし
乃流れ新古今　其の人に
清水流るゝ柳の蔭　しばし
とてこそ立ちとまる涼みとて
言乃葉の末の世ゝまでも残る
老木なりし　やがて来し人
上人がた十念を授け給ふ前を
立ちとみえし法の朽木が柳の
古塚よりも現はれて小
くわし　猶しきやきそ共
朽木乃柳のふる枝もさては我か
ゆし巻しゆるし　思ひ乃珠の

尊くゆゝしく法を聞して
後出の禅子こそ御物教乃遠
月もくもらぬよもすがら露を
弟しく被かく 流水羅路
海蔵より御根除に残ひ以て
刹塵にいたるまでゆゝしきよ将来乃
様時をえて ぬる法となりし

あけの道にあらひく旅路の
なしへ 流生旅気必ず往生の
功力ありひの仏て菩薩まても
備果よりかゝる聖末乃師の髪も
乱るゝ白髪乃老人忽然と現れ
いそよ悲しも 頼さらひたる
有様なわ めーきや那きも

西方便を一蓮生但使一生心不
退まで花のへはてくよ芽うひ
上品上生までもんすみ嬉しき
煩悩ひてよ滅し孫勤とこさ
生きては旅悟りの出所在道きのは八
りりて佛果り いちにはへ美
当世や灑濁悩威げ礼奉所望

ましまそし超世の出所よ力を
但をそ他力お舟ふのわおえち
分浅誰よいさしんきと一葉の
舟おちろうなうすやり舟皇嘉み
貨秋りんぎくや秋明風の吉舟
ぢわく尔極の一葉お上よ然妹
乃禁てさくりふ乃忠引渡ふ海

よわざくら出る杯の花も
柳乃とをかしや　書か宗
花清きにも堂前の楊柳寺前乃
第とそ誦めたえさぬ木たわ
それうみ浦陽やぎよみ流るの
いつしへ露さよみえし漣浪を
ゆたまの深き水上よ金色乃
ひわさらは梢末乃柳たちまちに
楊柳観音咒影まちにたえせぬ
跡とめて利生あまたか済度を
ときら霊地也ざ飛大郡の花盛
あかみや人の清遊にも闘鶏乃
庭のおもゞ四本乃木枝して
音よりはなの深響乃音　柳桜を

おもほえすきは梅の香も
歌舞乃菩薩の舞の袖をかへし哉
上人の御のりをきくよりか
誹謗の舞もきさはとぞ蔵の
渡乃玉もぬくは我に梅乃
開中さんと咲ふ色きみとをも
なき人
花のさ此ぬまは梅條を

わかぬ色を折は香梅の染も
たをやかなる花の老木の
枝もひくなく色ゝの
う鶯やゆきりをともふ足
もともよはくらはく水る
ぶるを和歌梅のるさ曙の花とく流
夜のまくらの一樹の古きわ成

他生の縁なれば上人乃法西明
蝶乃風折りうひ露も木の葉も
散〻に露も末路なき安ゝり
陰果て残る枯木となりにけり